2019年度（2019年7月1日～2020年6月30日）事業報告

□この１年

今期、上半期の活動は比較的順調に進めることができました。一方下半期は、新型コロナウイルス感染症の影響により、日本においてもラオスにおいても、活動が大きく制約されました。東京事務所では３月中旬から事務所はテレワーク体制をとりました。計画されていた織物展やピーマイパーティなどいくつものイベントが中止となり、資金調達に影響を与えています。またプロジェクト管理のためのラオスへの渡航が全くできなくなっています。ラオスにおいても、春先のロックダウンにより、官庁、会社、学校などが一時的に閉鎖されました。ラオス事務所があるヴィエンチャン都でも人々は居住する地域を越えての移動が原則禁止にとなり、約1ヶ月、事務所もテレワーク体制となりました。プロジェクトが進行しているヴィエンチャン県にもスタッフが調整、視察に行くことができない状況となり、各種活動は制約されました。５月になり東京でもラオスでも厳しい状況は緩和されてきていますが、日本人がラオスへ渡航できない状況や、これまでのようにイベントが実施できない状況は続いています。

活動の課題、重点的取り組み

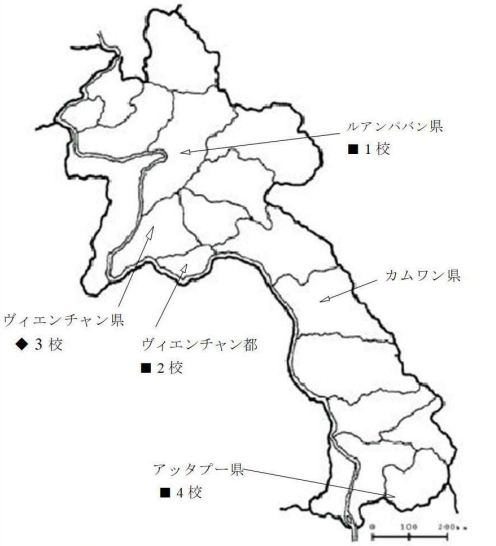
2019年度は、新たに始まった第8次中期計画に基づき活動を展開しました。国際協力ＮＧＯとして活動の質を高め、安定した運営が長期的におこなえるよう取り組むというこれまでの基本方針を継承し、組織運営においては運営の明確化、効率化。プロジェクト運営では論理性を高めることを努力しました。東京事務所とラオス事務所の共有も強化され、組織運営および事業におけるＰＤＣＡサイクル（Plan計画→ Do実行→ Check評価→ Act改善）が定着してきています。

懸案であったラオス政府との活動覚書MoUが昨年度締結され、新しく始まった日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業によるヴィエンチャン県での図書館整備を通した読書推進事業1年目は順調に進み、2月に関係者による評価会議で総括することができました。その後3月から2年目の事業を開始したところ、ロックダウンにより中等学校2校での図書館建設が着工が遅れるなど影響がありましたが、現地業者などの努力により、プロジェクトに大きな影響を与えることなく進捗しています。

資金調達においては、定期的な募金活動を継続して実施し、ある程度の成果がありましたが、やはり新型コロナウイルスの影響で、重要なイベントの実施など、対外活動が中止となったことや、社会活動の縮みの影響を受けて寄付が大きく減少し、会の運営は大変厳しい状況となりました。しかし6月に皆様に呼びかけさせていただいた特別募金に対し、たくさんの方が応えてくださり、また持続化給付金をうけたことなどにより、決算では昨年度の大幅な赤字を黒字化させることができました。

このコロナ禍により、様々な活動の制約がある中で、成果を得ることが求められるようになりました。その結果、ウェブやソーシャルメディアを用いた広報、支援者サービス、および物販など、これまでの取り組みを発展させました。ラオス語絵本プロジェクトも「外出自粛中のボランティア」としてメディアに取り上げられたことにより、大変たくさんの方が参加くださいました。ラオス事務所では、ソーシャルメディア上に読み聞かせ動画をあげることで、子ども達がこれまでとは違う方法で本の楽しさに接する機会を提供できるようになりました。また私たちの財産である「図書」を積極的に売ることで、安定した資金調達となるよう取り組みを進めています。このように、今年度は大変困難であった年でしたが、次の発展に繋がる動きも作ることができたといえます。

2019年度 事業対象地域図



◆中等学校の図書館整備を通した読書推進事業：3校
■学校図書室新規開設：7校
○奨学金事業：ヴィエンチャン都、カムワン県、ヴィエンチャン県

成果

皆さまのご支援の結果、今年度は、ラオス語図書2種類7,000冊を現地で出版し、8か所で新規の学校図書室を開設することができました。今年度末までの累計ではラオス語図書 224種類 918,255冊（図書189/紙芝居19/教科書類6/ニュースレター10）を出版し、ラオスの小中高校10,577校(小学校8,849校、中学校1,728校）のうち、325ヵ所で図書室(うち16ヵ所は地域文庫）を開設し、2,732校に図書セットを配付。2,318校でフォローをしました。また、これまで全国14ヶ所の子どもセンターの運営を支援し、活動の活性化を支援しています。

プロジェクト運営

<計画> ラオスの子ども達の教育環境を改善する働きかけとして、今期も引き続き、ラオスにおいて以下の活動をおこなう

1. 子どもたちが読書に親しむ環境を整える「読書推進活動」
2. 子どもたちに良質な本を提供する「出版活動」
3. 子どもたちの居場所と音楽や創作表現活動の機会を提供する「子どもセンター運営支援」

さらに日本では、ラオスの状況や実施事業を紹介すると共に自己資金の拡充のために、各種イベントの参加と実施、出前講座活動、ラオス語絵本プロジェクトなどを展開する。

Ⅰ 読書推進活動

<計画> 今年度は、読書環境が十分でない大規模中等学校で、図書館を設置し、村教育開発委員会と協働しながら、図書館活動の活性化と定着を進める。また、これまで開設支援をしてきた学校図書室で、活動が不十分なところを再活性化する活動に取り組む。

Ⅰ-１．中等学校の図書館整備を通した読書推進事業

<計画> 中等学校（中学4年高校3年一貫校）では、生徒数の増加に比し図書室の整備が遅れていることから、これまでの事業実施経験を生かし、ヴィエンチャン県において、新たに3か所の中等学校で図書館の整備をおこなう。事業は3か年の計画で実施し、初年度の今年は、ポンホーン郡ポンサイ中等学校で事業を実施し、同校で図書館を建設すると共に、教員や生徒へ図書館研修を実施する。さらに、学校を管理する郡教育スポーツ局と村教育開発委員会と連携する体制を作ることで、持続する活動として定着することを目指す。

＜実施＞

1）関係機関との協働枠組みの構築

8月8～9日に、ポンサイ中等学校の村教育開発委員会（VEDC）のメンバー計9名に対し研修を実施。ポンホーン郡教育スポーツ局（DESB）のスタッフが講師となり、VEDCと学校図書館の意義や役割を伝えるとともに、建設中の図書館を視察し、持続可能な図書館運営に向けてVEDCがどのようなサポートができるか検討した。

2）図書館の建設

ポンサイ中等学校の建設工事は、建築家の野口と施工監理者のVannavongさんが連絡をとりながら進めた。野口は、8月、10月、1月に現地での設計・工事調整をおこなった。この結果、床面積120㎡、78席、本棚10台の規模の図書館が10月に完成した。

生徒や教員から聞き取りをおこない、教科書やカリキュラムに適した本を選び、3005冊（89%ラオス語、10%タイ語、1%英語）の蔵書とした。

3）教員及び生徒のトレーニング

図書館運営が未経験の図書館担当教員5名と図書館ボランティアの生徒15名に対し、ラオス国立図書館とともに「図書館運営研修」を2回に分けて実施した。第1回目は10月2～4日、第2回目は10月30～31日におこない、図書の登録、貸出方法、入館者記録、図書カードの作成などの図書館の管理運営を教授した。また、生徒が図書に親しむ方法として、本を利用した読み聞かせ・劇・暗唱・輪読・ゲームなどの手法を伝授した。研修後、11月1日に引き渡し式を実施した。

4）モニタリングと評価

1月10日・13日に、校長・VEDCメンバー・図書館担当教員・生徒など合計34名に対し図書館の運営や活用状況に関するインタビュー調査をおこなった。同時に図書館入館記録や図書貸出記録をまとめ、運営状況を確認した。

１日あたり平均192名の利用があり、全校生徒の18%に達し、予想以上の利用がみられた。また、研修を受けた全教員が、図書を活用した授業や読書推進活動を実施しているという成果も得られた。

日本から専門家の下田尊久さんと小林毅さんを派遣し評価分析をおこない、2月24日に評価会議を開催した。ラオス外務省・教育スポーツ省と県や郡の関係者、学校教員・ＶＥＤＣメンバーなど合計19名と共に、事業の実施と成果について検証した。さらに、評価会議後に、教育局と学校関係者とともにワークショップを実施し、次年度のポンサイ中等学校図書館の運営計画（資金計画を含む）の検討をおこなった。

5）2年次の事業開始

2月25日に2年次事業の署名をおこない、3月1日より事業を開始。2年次はポンホーン郡サ

カ中等学校とヒンフープ郡ヒンフープ中等学校において図書館の開設を実施する。当初、4月～5月に実施予定であったオリエンテーション会議とDESB向け研修は、新型コロナウイルスの影響で延期せざるを得なくなり、6月30日～7月3日にかけて、DESB、VEDCと当団体の三者による協定書（MoA）の締結と併せて実施した。

図書館建設については、野口が1月に現場を施工業者と確認し、施工場所の最終確認を行っていたことから、4月に施工業者と施工監理者と契約し、工事を着工した。3月以降は野口が現地を訪問することができない状況であるが、現地の施工業者や施工監理者と連絡とりあい、工事をすすめている。

＜課題＞

1年次の事業実施において、学校と県・郡教育局、村教育開発委員会、当会との連携は、事業を実施していくなかで良好な関係を構築することが出来たといえる。この経験を活かして2年次の2校においても良好な連携体制を築くよう進める。

カウンターパートである教育スポーツ省一般教育部（中等学校課）については、会議や研修の直前キャンセルや、提出書類の紛失、承認の遅延など困難な点がみられるが、今後より一層関係を密にし対応する必要がある。

（日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業）

Ｉ-２．学校図書室（ハックアーン）の整備

＜計画＞ 小中学校の空き教室に本と本棚を提供し、図書室運営に関する教員研修をおこない、学校に図書室を整備することで、子どもたちが日常的に図書に接する機会をつくる活動を継続する。これまでに設置してきた学校図書室の活動の停滞化を防ぐためフォローアップを強化する。

・ヴィエンチャン都及びヴィエンチャン県で、これまでに開設した図書室8か所を訪問し、活動状況調査を実施する。さらに、3県7か所の図書室に対し、管轄教育局や担当教員などから現状に関するヒアリングをおこない、必要なフォローアップ計画をたてて実行する。

・新規学校図書室の開設を7か所で実施する。

＜実施＞

既存の学校図書室のフォローアップ活動は、10月にヴィエンチャン都の3校、12月にヴィエンチャン県の5校を訪問し、担当教員や生徒に聴き取り調査を実施した。また、11～12月にかけて、ヴィエンチャン都1校、ルアンパバン県3校、サワンナケート県1校、チャムパサック県2校、計7校の学校図書室に対し、電話での聴き取り調査をおこなった。訪問調査したヴィエンチャン都の3校は、4月に図書の補充と運営研修を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により7～8月に延期することとした。電話調査した7校の学校図書室には、図書の補充をおこなった。

3月には、一昨年度災害に遭ったアッタプー県内の既存学校図書室4か所で、図書の補充と運営研修のフォローアップ活動を実施した。

（ご支援：緊急募金、指定寄付、キヤノン㈱、（公財）ベルマーク教育助成財団）

新規開設は、被災地のアッタプー県を含む8か所で実施し、これまでの開設累計は325校になった。開設時には、担当教員を対象に図書館運営研修を実施した。

【開設日	図書室No.	学校名	（所在地）	ご支援者名(敬称略)】
7月20日	HA318	パーオー寺院学校	（ルアンパバーン県）	笠原岳夫
11月1日	HA323	ポンサイ中等学校	（ヴィエンチャン県）	※上述Ｉ-1事業にて実施
3月10日	HA324	バンドン中等学校	（ヴィエンチャン都）	福岡那の香ライオンズクラブ
3月12日	HA325	シェンダー小学校	（ヴィエンチャン都）	笠原岳夫
3月23日	HA319	トンテー中等学校	（アッタプー県）	緊急募金2018
3月23日	HA320	サナームサイ中等学校	（アッタプー県）	緊急募金2018
3月23日	HA321	ドンムアン小学校	（アッタプー県）	緊急募金2018
3月23日	HA322	タドゥア小学校	（アッタプー県）	緊急募金2018

＜課題＞

今年度は、調査やフォローアップで12校、新規開設で8校、併せて20校の図書室を訪問することができた。近年の課題であったフォローアップ活動に力を入れ、例年に比べ実施数を

大幅に増やしたが、その分ラオス事務所の負担も大きくなった。ご支援と現場状況について東京とラオスで情報を共有しながら、効率的・効果的な支援校の選定をしていきたい。また、事前の状況調査で把握した情報を分析し、学校図書室ごとの状況や課題に見合った図書補充やフォローアップ研修のプログラムをアレンジできるように努めたい。

Ⅰ-３．ALC図書館（ラオス事務所併設図書館）活動

<計画> 配架や展示を工夫し読書に興味が湧く空間作りをおこない、子どもたちが主体的に参加するアクティビティを工夫し、子どもたちの満足度を高め、来館者数の増加をめざす。

・既存の活動の内容を検討しつつ継続的に実施する。

・年間で1～2回、新規活動を企画し実施する。

・図書の配架と展示に関するスタッフ研修をおこない、実践する。

＜実施＞

・週6日（平日9時～17時、土曜9時半～15時）の開館を継続。来館者数は1日平均26人で昨年度とほぼ同数を維持している。内訳は、夏休み中は1日平均18人で、学期中は28人となっている。来館者は変わらないが図書を借りる人数は減少しており、今年度は来館者数の1％を下回った。

・年間で以下の計3つの企画を実施した。

7月15日「ラオス伝統お菓子作り」

8月21日 愛知県立大学のスタディツアーで、学生の企画により、大学生とラオスの子ども達との交流会を実施し、「習字」「折り紙」「盆踊り」を楽しんだ。

12月9日、18日 日本から3か月間受け入れた学生インターン加藤萌音さんが、子どもたちとのプログラム「Going to the book’s world」を企画・実施した。

・10月と2月に、図書館情報学専門家の下田尊久さん指導のもと、ラオス事務所スタッフが「図書の分類と配架」「図書館展示」「学校図書館と授業の関係作り」実務研修を実施した。

＜課題＞

特別イベントとして新規企画の実施はできたが、日常の活動については、見直しや新規プログラムを検討する時間が取れなかった。また新型コロナウイルスの感染防止のための学校閉鎖に伴い、3月末よりALC図書館も閉館することにしたため、再開後にどれだけ来館者を呼び戻せるかが課題となる。

Ⅰ-４．新規事業の案件形成

<計画> これまでの経験を活かし、内容を発展させた読書推進事業を3年後に開始するために、案件形成の調査・検討をおこなう。2018年1月に終了した「学校図書室の地域への展開事業」の事後調査をおこなうと共に、住民による地域文化継承活動の検討など、様々な角度から情報を収集し検討する。

＜実施＞

新規事業の資金検討のため、在ラオス日本大使館に「日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業」について、JICAラオス事務所に「草の根技術協力事業」について聴き取りをおこなった。またこれら事業をラオスで実施している他のNGO団体からも情報収集をした。

公的資金の選定と案件形成については、次年度の早い段階で方針を決定し、申請に向けた準備を進める。

Ⅱ 出版プロジェクト

<計画> 専門家のアドバイスを得て、質の高い図書を計画的に出版する。出版については、文化継承を意識した本、著作権を得た海外翻訳本などを含めて、多様な本を計画的に出版できる体制をつくる。

・2～3タイトルの図書または紙芝居の出版をおこなう(うち、新刊1点、再版1～2点)。

・スタッフが図書制作業務に関わる技術（編集、デザイン、校正）を習得できるよう研修を実施する。

・市場を意識した出版をするために、現状調査・ニーズ調査をおこなう。

・デジタル図書に対応できる準備を進めるため、著作者との契約にデジタル許諾をふくませる。

＜実施＞

再版1作品、新刊1作品の計7,000部を出版した。当会がこれまでに出版した図書・紙芝居は累計225点 918,255部となった。

	作品名	作者名	出版数	主な支援者
1	『トーフア（雨もり）』 第2版	文）オ　オー 絵）コンレー　ナインハン	4,000部	学習院女子大学 絵本出版指定募金
2	『おおきなかぶ』 初版	作）A.トルストイ（日本語訳 内田莉莎子 ラオス語訳 チャンタソン インタヴォン）　絵）佐藤忠良	3,000部	夏募金2019 キヤノン株式会社

『トーフア』は、1999年に出版してから絶版になっていたもの。暗闇の中で泥棒とトラが鉢合わせするラオスの民話で、ラオス人作家が、絵本作家わかやまけんさんにアドバイスいただきながら完成させた作品。ラオス事務所での再版検討会議で5冊の候補から選定した。

『おおきなかぶ』は、ラオス国内で非常に人気の高い話であることから、ラオス語版を出版することを決定。日本語の出版元である福音館書店との出版契約や、ラオスの印刷業者とのやり取り・色校正などについて、専門家として新藤雅章理事や海外出版コーディネーターの高野直子さんからアドバイスを頂きながら製作した。

ラオス事務所企画の新刊候補作品『アッタプーの詩』は、2018年にダム水害被害を受けたアッタプー県のサナームサイ中等学校の先生と生徒の合作による詩集絵本である。3月に当該校を訪問した際、次年度の刊行を目指して進めることで学校の合意を得た。

スタッフ対象の図書制作業務に関わる技術研修は、今年度は業務が忙しく実施する余裕がなかったため、次年度の実施を予定している。
市場を意識した出版のための現状調査・ニーズ調査の一環として、月毎の販売実績のデータ分析をすることにした。本年度はデータ入力をおこない、本のタイトルごと店舗ごとの売り上げ実績から傾向や特徴を掴み、分析をおこなう。
また、デジタル許諾を含めた出版契約書の改訂に取りかかった。

＜課題＞

現在のラオス事務所スタッフは再版の経験は有しているものの、新刊を出版する経験は不足している。専門家の助力を得て翻訳版の出版を経験することで、スタッフの人材育成に努めたい。しかし、日本とは異なる出版・印刷環境において、到達点をどことして育成するのか明確にする必要がある。

Ⅲ 子どもセンター(CCC/CEC)

＜計画＞ 1994年に子どもたちの自己表現活動の場として開設した「子ども文化センター（CCC)」は、社会に定着し全国に広がった。しかし子どもたちの環境が変化する中で、来館者数が減少し活動が停滞するセンターが増えた。各センターの運営安定のために、どのようなアドバイスや支援ができるかを検討していく。

・当会が支援してきた子どもセンターの状況を調査し、支援・連携するセンターの検討をおこなう。

・センターに関係する青年海外協力隊員・元隊員との情報交換をおこない、活動状況や課題を把握する。

＜実施＞

ラオス事務所では、1～2月にかけて、これまで当会が支援してきた子どもセンター計6か所（ヴィエンチャン都1か所、サイニャブリ県4か所、ボリカムサイ県1か所）の状況把握調査を電話による聴き取りで実施した。
東京事務所では、1月18日に「元青年海外協力隊員と一緒に、ラオスの児童館『子どもセンター』について考えよう！」と称した活動ミーティングを開催し、子どもセンターで活動してきた元隊員5名をパネラーに迎え、センターの現状と課題の共有や今後の可能性について、参加者27名とともに意見交換を行った。

＜課題＞

状況調査の内容を踏まえ、当会のこれまでの経験やスキルを活かした支援・連携方法について、他の事業とのバランスや資金の状況なども鑑みながら検討していく必要がある。

Ⅳ 奨学金事業（受託事業）

＜計画＞ ・2012年より受託実施してきた高校生（中等学校5年～7年）対象の奨学金事業を継続。奨学金受給者は、ヴィエンチャン都160名、カムアン県140名、合計300名となる予定。
・上記の受託事業の7年間の実施経験に基づき、新規奨学金事業を立案する。Ⅰ-1の事業地（ヴィエンチャン県ポンサイ中等学校）にて、10名の生徒に対して、奨学金の給付を開始予定。

＜実施＞

タイのThe Siam Cement Public Co., Ltd. (SCG)より、8年目の受託。昨年度に引き続き、高校生（中等学校5年～7年生）が対象で、教育局と協力し、ヴィエンチャン都全域及びカムワン県4郡にあるすべての公立中学高校に願書を配布。書類選考の後、審査員が直接学校や家を訪問し面接をおこなった。ヴィエンチャン都160人、カムワン県140名、計300名の奨学生を決定し、1年間の奨学金を2回に分けて提供した。

（タイ The Siam Cement Public Co. Ltdより受託）

当会独自の新規奨学金事業として「ALC奨学金制度」を立ち上げた。本年は、Ⅰ－1の事業地であるヴィエンチェン県ポンホーン郡ポンサイ中等学校にて実施。11月に募集を開始し、12月に選考会議をおこない、4～7年生の計5名の学生を決定し、1月に奨学金を給付した。

（ご支援 マンスリーサポーター、指定寄付）

＜課題＞

SCG奨学金事業は、事業自体の意義は高いものの、事務作業が煩雑化しており、都や県教育局のスタッフの人材も不足していることから、当会スタッフにかかる拘束時間や業務負担は少なくない。また、新型コロナウイルスの影響で次年度の奨学金事業をラオスで実施しないと主催企業が決定したことから、当受託事業はひとまず終了する方向である。

ALC奨学金は、学校への状況調査や協議など、半年間にわたり準備をすすめ、実施にこぎつけることが出来た。図書館整備事業対象校で実施することで、相乗的な効果を図りたい。

Ⅴ 国内事業

Ⅴ-1． 各種イベント

＜計画＞ ラオス理解、活動理解の促進となるよう、目的、成果を明確にした上で参加する。新たな支援者、協力者の拡充のため、新規名簿登録者100名、フェイスブックのフォロワーを現状の950人から1100人に増やす。

＜実施＞

グローバルフェスタ2019や東京アメリカンクラブでの展示会、英国風喫茶メイフィールドでの販売会などを通して、ラオス理解、活動理解を広める活動をおこなった。一方、新型コロナウイルスの影響により、恒例の京都織物展、ピーマイパーティ、ラオスフェスティバルが中止となった。年間の新規名簿登録者は109名となった（うち「ラオス語絵本プロジェクト」での登録が80名）。また、期末のフェイスブックのフォロワー数は1,218人となり、目標を達成した。

＜課題＞

定期的なイベントが減少した分、新たなイベントの計画が必要である。
オンラインによる新しい形のイベント形成も考える必要がある。

Ⅴ-2． 出前講座活動

＜計画＞ 学校などを訪問して実施する「出前講座」を、年間2～3件、開発教育として継続して実施する。

＜実施＞

パルシステム神奈川ゆめコープと協同し平塚市立横内小学校へ開発教育プログラムや絵本作り体験プログラムを行った。その他、以下の学校に講師派遣をおこない、ラオスや国際協力、当会の活動への理解を促進することができた。

7/6　町田市立真光寺中学校（学習院女子大学開発教育チームと協力）
10/2　湘南学園中学校高等学校・図書委員会
10/30　平塚市立横内小学校へ絵本プロジェクト（パルシステム神奈川実施）
12/4　駒澤大学
12/21　藤女子大学
2/19　女子美術大学附属中学校

＜課題＞

今期は例年より多くの学校から依頼があり、6件の講師派遣を実施することができた。次期はオンラインによるイベントや講義にも取り組みたい。

Ｖ-３．ラオス語絵本プロジェクト

<計画> 支援者の拡大及び開発教育として、個人協力者に加えて、企業・学校・団体と連携して実施。年間25件の参加、500冊の図書の完成を維持する。既存の翻訳シートのデジタル化を完了させる。図書リストの入れ替えの検討をおこなう。

＜実施＞

今年度のプログラム参加は94件で、合計690冊の絵本が作成された。新型コロナウイルス感染拡大防止策による外出自粛要請中、「自宅でできるボランティア」として東京新聞に掲載され、申込者数が急増した。

＜課題＞

翻訳シートの改訂データ化は、担当インターンを確保できず継続できていない。図書リスト検討も実施することができなかった。

プログラム参加数が増え、需要が高いことが分かった一方で、スタッフは在宅勤務下での対応で負担が大きかった。

Ｖ-４．書き損じハガキの収集

<計画> 資金調達及び支援者拡大として、個人協力者に加えて、企業・学校・団体からの協力を得る。新規支援者の開拓をしつつ、年間100件、2,000枚を目標に葉書及び切手の収集をおこなう。

＜実施＞

今期は88件、書き損じ・使い残しハガキ1,828枚、未使用切手153,470円、計258,085円相当のご支援を頂いた。

＜課題＞

目標値には若干達することができなかったが、外出自粛要請の中で家の片づけをおこなう人が増えたことにより、切手やはがきの寄付につながったと考えられる。より収集を拡大するためには、企業や自治体との共同などプロジェクトの立て方を考え直す必要がある。

会の運営

<計画> 市民性を大切にしながら、より専門性をもつＮＧＯとして安定した活動が継続するよう、東京、ラオス両事務所間での情報共有を深める。事業運営における論理性を常にチェックすることで活動の質を高め、研修などによりスタッフの能力を高め、組織の運営能力の向上を図る。広報活動を強化し、支援者を増やすために、ファンドレイジングの手法により資金調達をすすめることで、経常経費の公的資金への依存度を下げる。

＜実施＞

ラオス事務所の組織運営能力を強化し、東京事務所と連携をより深めることを念頭に、組織運営、プロジェクト実施において、今年度も計画→ 実行→ 評価→ 改善のPDCAサイクルを重視した運営を継続した。日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業によるヴィエンチャン県での図書館整備による読書推進事業が本格化し、全力で取り組みをすすめた。

コロナ禍により、現地でのプロジェクト運営に影響が出たほか、国内でもイベント中止が相次ぎ、資金調達において困難が生じた。しかし特別募金などにより、多くの方々よりご寄付をいただくことで、運営を継続させることができた。感謝に堪えない。この逆境に少しでも対するために、ソーシャルメディアによる広報、物販、ラオス語図書販売などに取り組んだ。

Ｉ 理事会

<計画> 経営、資金調達、プロジェクト進行などの状況を把握し、プロジェクトの進捗、成果の確認により、組織運営を管理し運営方針の決定をおこなう。年に3～4回開催する。

今期の運営責任を持つ理事・監事は、総会に議決により決定する。

広報や出版等の事業分野において、理事は役割を積極的に担う。

＜実施＞

以下の9名の理事、監事により運営が担われた。

理事　・飯川 桃子　　・塩谷 光
　　・新藤 雅章　　・チャンタソン インタヴォン
　　・野口 朝夫　　・西村 恵子
　　・森 透
監事　・矢崎 芽生　　・脇田 康司
アドバイザー　・小林 毅
顧問　・長野 ヒデ子　　・やべ みつのり

年3回理事会を開催し、参加者は延べ22名であった。毎回、財政状況、資金調達、プロジェクト運営、ＭｏＵ更新についての報告、中期計画の振り返りの討議のほか、組織運営強化の方策などが話し合われた。

第1回 8/31　7名出席
　主なテーマ：17期事業報告案・決算報告案の承認　総会までの手順確認　理事改選
第2回 11/30 7名出席
　主なテーマ：認定NPO申請報告、日本ＮＧＯ連携無償事業進捗報告、「おおきなかぶ」出版準備報告、カレンダー販売報告
第3回 2/29　実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、急遽中止
第4回 6/29　8名出席（うち書面評決3名、オンラインにて開催）
　主なテーマ：19期事業計画･予算案 アドバイザー契約の承認 事務所体制等の報告
（上記は、理事監事の出席人数。その他、アドバイザー、スタッフが参加している）

総会

＜実施＞

9月14日、2019年度通常総会を活動会員33名（書面表決者、委任状を含む）、活動協力者6名、計39名が参加し、ライフコミュニティ西馬込で開催した。2018年度の事業報告案・決算報告案、理事・監事の選任に関する事項が承認され、2019年度の事業計画書、第8次中期計画が報告されました。第2部は「皆で考える『学ぶとは？』」をテーマに日本の夜間中学のドキュメンタリー映画「こんばんはⅡ」を観て意見交換会をおこない、日本やラオスで「学ぶ」機会を失った人々の存在、「学ぶ」ことの意義、支援のあり方などを語り合った。

Ⅱ 東京事務所　組織運営

東京事務所は 以下のメンバーで運営を担当した。

野口朝夫	常勤非専従事務局長	1992年1月入職
赤井朱子	統括、プロジェクト担当	1995年4月入職
伊藤珠希	国内事業担当	2018年10月入職

年間を通じて、常勤専従スタッフ2名、常勤非専従事務局長1名で運営を担当した。また今年も会計ボランティアスタッフ2名（風間美苗さん、福島孝好さん）の継続した協力により、事務局が支えられた。

Ⅱ-１ 事業運営

＜計画＞ ・事業成果の継続と発展を重視する。
・読書推進の専門家・活動家と連携し、プロジェクト運営の質を高める。
・会員および支援者による継続支援のツールとして「広報」活動をおこなう。

＜実施＞

今期は以下の通り専門家派遣及び事業調整派遣がおこなわれた。

下田尊久	10/10-13、2/8-13　計2回（うち1回は自費）
小林毅	7/22-26、10/8-13、2/5-13　計3回（うち1回は自費）
野口朝夫	8/2-14、10/9-15、12/31-1/8　計3回

伊藤珠希　　8/18-27　計1回
赤井朱子　　2/3-14　計1回

長年にわたり取り組んできた学校を拠点とする読書推進活動の発展として、ヴィエンチャン県における中等学校での図書館整備を通した読書推進事業が本格化した。地方自治体関係者や村教育開発委員会のメンバーに対する啓蒙研修をおこない、村教育開発委員会と持続的運営について契約を結んだ。１校での図書館建設が完了し、生徒達の図書館利用が始まっている。事業１年目の成果に対して、評価会議においても高い評価を得ることができた。
新しく始めた会独自の奨学金活動に関し、報告書を作成し、支援者へ限定して配布したり、物販専用サイトの立ち上げなどにより、目的に特化した広報、報告活動をおこなった。
日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業の実施においては、ステップごとに派遣した図書館専門家による研修がおこなわれた。さらにアドバイザーを派遣し、とかくプロジェクトの部分に目が行ってしまう傾向があるラオス事務所スタッフが、つねに全体を見通すことが習慣となるようトレーニングを繰り返し、ラオス事務所の活性化につながった。
村教育開発委員会と持続的運営について契約が結べたことは、今後の読書推進活動の持続的展開において、おおきな成果に繋がると考える。図書館建設においては、専門家の派遣により、建築的性能が保証され、使いやすい施設を建設することができた。

＜課題＞

理事や監事の指導、ボランティアスタッフの貢献、会員や寄付者のご協力により、事業を実施できた。さらに事業運営の安定、質の向上のためには、組織運営にかかわる専門性を持つボランティアスタッフやプロジェクトにかかわる専門家の参加が必要とされる。

Ⅱ-２ 組織運営

＜計画＞ ・モニタリングにより、定期的に報告書が作成され、評価実施される。
・東京事務所が担う事業の指標を開発する。
・両事務所の情報共有が確実となるよう、報告書の共有をすすめる。
・ボランティア、インターンに対し、事務所運営やイベント等の担い手として参加を高める。
・認定ＮＰＯ法人の更新をすすめる。

＜実施＞

アドバイザーが主導する形で定期的にスタッフ会議を開催し、課題を話し合い解決するとともに、中長期的な視点で、組織運営の改善のための準備をおこなうようになっている。
2019年4月に空席であった日本人駐在員がラオスに赴任し、ラオス事務所との情報共有など、前年度において問題があった事務所間のコミュニケーションを改善することができた。
さらに、東京事務所から事務局長やスタッフ、さらにアドバイザーが定期的に訪ラオし調整協議をおこなうことで共有性が高まっている。その結果として、年次での活動振り返りや計画策定が東京事務所主導でなく、ラオス事務所での討議を経て決定されるようになった。
ＮＰＯ組織の評価指標の一つである、支援者が税優遇を受けられる「認定ＮＰＯ」の更新が、ボランティアスタッフの尽力により完了した。有効期間は2024年11月25日までとなる。
2019年5月に、懸案であったラオスでの活動覚え書きＭｏＵを結ぶことができたが、その規定にともなう各種報告や進捗会議などが、役所の都合もあり順調に進まない事態が続いている。前回ＭｏＵに関わる情報が十分でなかったことを踏まえ、注意深く情報収集を心がける必要がある。
会員数は、活動会員が10％ほど減少。賛助会員数は昨年とほぼ同数でかわらない。

＜課題＞

安定した組織運営をおこないさらに活動の質を高めるという目標から、スタッフの業務量が大変増加しており、どのように省力化するかを検討する必要がある。業務の整理や作業効率を高める工夫など改善努力が必要とされている。

Ⅱ-3 資金調達・広報

＜計画＞ ・これまでの寄付金及び事業補助金を維持しながら、「ファンドレイジング」に基づき、新な寄付者を獲得するために、ニュースレター、年次報告書、ホームページ、ブログ、フェイスブック、メーリング

リストなどのコミュニケーションツールの対象（読者）に応じた発信活動をおこなう。
・ホームページの改訂をおこなう。
・年に二度の特別募金が企画され、提案書の承認を得て実施される。
・マンスリーサポーター制度を促進し、新規10口の加入を得る。
・緊急募金実施要項を作成。また、遺贈制度の開始に向けて研究をおこなう。

＜実施＞

各種活動を紹介するために、以下のような情報発信をおこなった。

・ホームページ記事発信　　：27回　（前年度：27回）
・ブログ記事投稿　　：23回　（前年度：8回）
・フェイスブック記事投稿　：151回　（前年度：120回）
・フェイスブックフォロワー：1,218人（前年度：998人）　※期末時点
・インスタグラム記事投稿　：16件　（前年度：40件）
・ツイッター記事投稿　　：16件　（前年度：55件）
・新聞記事掲載　　：2回　（前年度：2回）

ホームページの更新は順調におこなわれている。スタッフブログもラオスからの発信が増え、魅力あると評価を受けている。ＳＮＳによる広報は、効果測定の結果、ラオスからの発信も含めフェイスブック発信を強化した。とりわけラオス事務所の読み聞かせ動画は、ラオスで数多くアクセスされている。

東京新聞に2回、9月3日「夏募金2019」4月22日「ラオス語絵本プロジェクト」について掲載された。紙媒体としては「ラオスのこども通信」を以下の通り年3回 計4,500部発行した。

75号（10月発行）「ＡＬＣ図書館の魅力度アップを目指して」
76号（2月発行）「５人のＡＬＣ奨学生が決まりました！」
77号（6月発行）「コロナ禍と子どもたち、学校、本とのふれあい」

年次報告書は10月に1,500部発刊した。奨学金を支援するマンスリーサポーターの方々用に「マンスリーサポーター通信」を1月に発行した。

これらの各種媒体を使った広報活動の強化により、寄付者、支援者の人数は少しずつ増えている。新聞掲載やイベントへの来場を機会に支援に繋がる方もいらっしゃる。より効果的に会のメッセージを適確に伝えるために、広報のターゲットを明確化と、デジタル発信の強化が必要とされている。

テーマを定め呼び掛ける特別募金は、以下のスケジュールで2回実施した。

・7月～9月：夏募金「ラオス版『おおきなかぶ』をラオスの子どもたちにも！」
　　募金額合計932,113円（内、キヤノン株式会社からの支援325,260円）
・12月～3月：冬募金「本との出会いは子どもたちの未来への第一歩」
　　募金合計893,486円
・6月～9月：特別募金

達成率は、夏募金、冬募金共に約91％となり、2016年から開始した特別募金においては、達成率が高い1年となった。

恒例の「ラオスのこどもカレンダー」は、『なんのどうぶつ？』を1,500部制作した。販売数は1,076部、目標の1,200部にに届かなかったが、リピーターも多く大変好評で、約87万円の売上となった。

WEB上で出版図書や小物を販売するサイトBASEでショップを開設した。遺贈制度についての情報収集をすすめている。ホームページの本格的な改訂は予算が組めず実施できなかった。

＜課題＞

資金調達では、リピーターによるサポートが継続されているが、今後、ＳＮＳで情報を共有している方々や絵本プロジェクトに参加してくださった方を、どのように活動支援者、新規寄付者として結びつけることができるかが課題である。

使途の自由度の高い自己資金の調達がより必要となっている。

Ⅱ-４ 人材育成

＜計画＞ 専門家とアドバイザーの指導と協力を受けつつ、募金、広報、事業評価、図書館運営、出版の領域で実務研

修を重ねる。

＜実施＞

定期的なミーティングにおいて、アドバイサーにより募金、広報、事業評価について継続的にトレーニングを受けた。また図書館専門家による図書館活動の意義についての研修がおこなわれた。その他、スタッフは国際協力に関する研修に参加し、活動の質を高めるための学びの機会を持った。

＜課題＞

組織活動の安定のためには、さらにファンドレイジングや広報に関わる人材、プロジェクト運営のためには、読書推進活動にかかわる人材の育成が必要である。

Ⅱ-5 活動ミーティング・勉強会

＜計画＞ ・活動ミーティングは、プロジェクト報告やイベントの打ち合わせなどの他、ラオス語絵本プロジェクトの体験なども入れ、年4回開催する。

・「ラオスを紹介する」「活動内容についての共感を獲得する」場として、勉強会や活動報告会などを、活動ミーティングの日程と調整しながら実施する。

＜実施＞

活動ミーティングは以下の日程で実施した。

7/22　現地事業報告、イベント企画（参加者11名）

11/16　現地事業進捗報告（図書館整備とは)、「子どもセンター」とは（参加者15名）

1/18　「ラオスの児童館（子ども文化センター）について考えよう」（参加者27名）

1月の活動ミーティングは、ラオスに派遣された元青年海外協力隊員をゲストに迎え、聖心女子大学グローバル共生研究所で実施。企画運営をボランティアが担い、新しい参加者が加わり、活発に意見交換ができた。2/29に実施予定であった駐在スタッフ帰国報告会、 3/17の活動ミーティングは、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、実施を中止した。

Ⅱ-6 ネットワーク

＜計画＞ ・国際協力ＮＧＯセンター（ＪＡＮＩＣ)、教育協力ＮＧＯネットワーク（ＪＮＮＥ）のネットワークを維持する。

・図書館・読書推進・紙芝居などのネットワークとの連携を検討する。

・学習院女子大学などの教育機関とインターンや開発教育における連携を継続する

＜実施＞

国際協力ＮＧＯセンター（ＪＡＮＩＣ）正会員、教育協力ＮＧＯネットワーク（ＪＮＮＥ）会員を今年度も継続し、森透理事がＪＮＮＥ代表を務めた。

また、例年に引き続き、学習院女子大学の開発教育チームと連携して、町田市立真光寺中学校で今年度も開発教育授業をおこなった。

出版の質を高めるため、海外出版コディネーターの高野直子さんにより、出版図書へのアドバイスをいただいた。

Ⅱ-7 インターン・ボランティア

＜計画＞ 開発教育の一環として日本人のインターン・ボランティアを受け入れる。

＜実施＞

インターンは、継続2名（内田由佳さん 加藤萌音さん)、ドットジェイピーを通じて夏と春に短期計3名（菅野光太郎さん 田中遙奈さん 井上亜子さん）を受入れ、合計5名が事務所業務をサポートした。

Ⅱ-8 イベント

＜実施＞

この1年、以下のようなイベントを実施・参加した。

		＊主催事業
7/2-7	「語りかける布と石vol.2」帝国ホテルプラザアートセレクション	開催協力
7/6	沖電気工業㈱「第19回ラオス語絵本を作ってラオスの子ども達に送ろう！」イベント	＊
8/3	（株）ニコン「ラオス語絵本づくり」イベント実施	＊

9/28-29　グローバルフェスタ2019　出展
10/16-11/4 東京アメリカンクラブにて「ホアイホンセンター展」 開催協力
11/13-17　英国風ティーサロンメイフィールド「ラオスの彩りvol.10」＊
12/18　（株）ニコン「ラオス語絵本づくり」イベント実施＊
6/17-21　英国風ティーサロンメイフィールド「ラオスの彩りvol.11」＊

以下の訪問受入もおこなった
9/4　早稲田大学ラオス学校建設教育支援プロジェクト～スーン～
10/7　国際開発センター ヒアリング訪問
11/7　認定ＮＰＯ 更新審査に係る現地確認
12/9　東洋大学Smile F LAOS
12/16　早稲田大学ラオス学校建設教育支援プロジェクト～スーン～
2/12　ANT-Hiroshima
3/5　埼玉大学 学生来訪 インタビュー

Ⅲ ラオス事務所　組織運営

この1年間の体制は以下の通りであった。

スラピー	ラオス事務所所長	2006年1月入職	2011年7月から事務所所長
スラート	ラオス事務所所長補佐		2020年1月入職
チャンシー	事務所図書室・図書在庫管理		1998年8月入職
バンロップ	図書館事業、セミナー講師補助		2013年7月入職
スパン	セミナー講師補助、図書室活動		2014年12月入職
スパポーン	事務・会計補助		2014年12月入職
渡邉淳子	日本人駐在員		2019年4月入職・ラオス事務所赴任

ダラー　顧問　2005年4月入職（2011年7月現地代表から顧問へ）
他　清掃1名、庭師1名　（パートタイム）

Ⅲ-１ 事業管理

<計画>
・「読書推進」「出版」「子どもセンター」の事業を着実に実施する
・事業実施の前提となるラオス政府との覚書MoU、MoAに必要な要件（定期的な報告書の提出、評価会議の開催、所轄庁への報告）を着実に実行する
・MoUⅡ（N連事業、奨学金事業以外のプロジェクトが含まれる）の締結を進める

＜実施＞

「読書推進」事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業の本格化に伴い、仕事量が増えている。とりわけ村教育開発委員会と共同するという初めての試みのため、丁寧な事前調整と管理が必要とされている。「出版」事業は予定通り進められたが、「子どもセンター」事業は余裕がなく充分には力を入れることが難しかった。

一方、ＭｏＵに規定されている報告業務、評価会議開催などは遅れがちだが進めることができている。他の活動をカバーするＭｏＵⅡの締結準備は地方自治体の対応が悪く進んでいない。

Ⅲ-２ 組織運営

<計画>
・事業の実施状況の振り返りがおこなわれ、事業計画案と予算案の策定に反映される。
・スタッフ会議が定期的に開催され、各業務の進捗確認、振り返り、実施計画、調整、業務分担確認などがおこなわれる。
・上記に関わる月例報告が、所長より東京事務所へ提出される。

＜実施＞

スタッフ会議の定期的な開催や東京からのアドバイザーによる事業の方向性、ＮＧＯとしての活動意義の研修により、スタッフが徐々にＮＧＯとしての活動全体を見通すことができるようになっている。振り返りや提案など意見交換も盛んとなっている。日本人駐在ス

タッフとともに、現地での資金調達のための図書販売活動やコロナ禍にある児童を対象とした読み聞かせ動画の作成など、工夫しつつ取り組むことができている。

＜課題＞

事業管理と同様、全体に組織運営能力は向上しているものの、まだ自主性において弱点がある。決められた枠組をこなし対応することはできるが、主体的に問題を想定し、対処を準備してゆくことは十分でない。これらの課題は、所長の主導が大切であり、所長の運営管理能力強化がなお必要とされている。

提出された月例報告書に対する東京事務所のフィードバックが必要とされる。

Ⅲ-３ 資金調達

＜計画＞ 【図書の販売】・販売実績のデータを整理し分析する

・図書販売委託先を現在の34か所から5か所増やす。

・フェイスブックなどを用いる図書販売の広報に取り組み、販売量を上げる。

・売れる本を開発する。

【受託事業】 ・奨学金の受託事業を継続する。

・国際機関、国際協力ＮＧＯからの図書セット制作の受託事業を継続する。

【新規事業】 ・自己資金拡充のため、ラオス国内の企業や団体へむけた募金（寄付）パッケージを検討する。

＜実施＞

【図書の販売】

・月ごとに販売実績を入力するフォーマットを作成し、どの店舗がどれだけの本を売り上げているか一括で把握できるようにした。図書販売委託先は31か所に減少した。

・フェイスブックなどの広報や、ラオスで活動するＮＧＯ団体への本の売り込みを促進するため、販売本リストの作成、訪問する国際ＮＧＯのリスト作成、ラオス事務所フェイスブックページの開設準備を行った。

・次年度の再版本として、これまで店舗で売り上げの良かった本『私たちの村の料理』、今後私立学校への売り込みで売れると思われる本『家のまわりの虫』を選択した。

【受託事業】

・タイのThe Siam Cement Public Co., Ltd. (SCG)の奨学金事業を受託した。

・国際機関、国際協力ＮＧＯからの図書セット制作の依頼は、今年度はなかった。

【新規事業】

・2月にラオス国内での資金調達のアイディアを出し合うワークショップを、事業アドバイザーの小林さんの指導のもと、ラオス事務所スタッフが実施した。

Ⅲ-4 人材育成

＜計画＞ ・専門家の協力を受けつつ、タイでの学校図書館の活動事例を視察するスタッフ研修を実施する。

・専門家（新藤理事、高野氏）の指導により、出版プロセスを通しての実務研修をおこなう。

・図書館の魅力を高めるため、専門家（下田尊久）による実務研修をおこなう。

・所長のマネジメント能力を高めるため、スタッフ会議の定期開催と月例報告を作成を駐在員がサポートする。

・月例報告に対し、東京事務所が定期的にフィードバックをおこない、その質を高める。

＜実施＞

・タイでの学校図書館の活動事例視察は、ラオス事務所スタッフの意見聴取を行ったものの、タイ側との交渉、研修期間の確保、新型コロナウイルスの影響もあり、まだ実施には至っていない。

・『おおきなかぶ』ラオス語版製作では、専門家（高野直子さん、新藤雅章理事）のアドバイスを受けながら、出版・印刷のプロセスを進めた。

・ALC図書館の改善や日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業での学校向けの研修を見据えて、専門家（下田尊久さん）によるスタッフへの実務研修を実施した（Ⅰ-3参照）。

・スタッフ会議の定期開催と月例報告の作成を駐在員がサポートした。スタッフ会議は、週1回のペースで開催しており、事業スケジュールのマネジメントが出来るようになった。

月例報告は、上半期は提出できていたが、下半期は提出できなかった。

・以下の日程で専門家によるワークショップや研修を実施した。

小林アドバイザーによるワークショップ　　：7/23-25, 10/9-10, 2/6-7 計3回

下田専門家によるスタッフ向け図書館実務研修：10/11-12, 2/12 計2回

小林アドバイザーによるスタッフ向けオンライン研修：5/20-22　計1回

Ⅲ-５ 広報

<計画>　・フェイスブックなどを用い、活動やラオスの教育事情に関する情報発信を強化し、日本社会及びラオス社会での団体認知度を上げる。

・図書販売の広報に取り組み、図書を入手できる団体としての認知度を上げる。

＜実施＞

・フェイスブックやスタッフブログ、ニュースレターなどで、ラオス事務所の活動やイベントなどの情報発信をおこなった。ラオス国内での団体認知度を高めるため、ラオス事務所のフェイスブックページの開設準備をおこなった（2020年7月開設）。

・図書販売促進のため、販売本リスト、訪問する国際ＮＧＯのリストを作成した。また、新型コロナウィルスによるロックダウンの期間、自粛生活の子ども達のために、スタッフが本や紙芝居を読み聞かせした動画をYoutubeチャンネルで配信した。

Ⅲ-６ ネットワーク

<計画>　国際協力ＮＧＯ（ＩＮＧＯ）、日系ＮＧＯ（ＪＡＮＭ）との連携を維持するとともに、ラオスのＮＧＯの中で当会の認知を広める。

＜実施＞

11月に教育スポーツ省とＩＮＧＯとの年次会議、1月にＩＮＧＯの年次総会に列席し、国際協力ＮＧＯとの結びつきを深めた。日系ＮＧＯ（ＪＡＮＭ）との連携は、メーリングリストを中心に関係を維持するとともに、コロナ禍以降、日本人駐在員どうしの情報交換をより密にし、情報交換の機会を設けた。

Ⅲ-７ インターン・ボランティア

<計画>　社会開発やＮＧＯへの理解を深めるため、ラオス人学生インターンやボランティアを受け入 れる。

＜実施＞

ラオス事務所で、日本人の学生インターン加藤萌音さんを受け入れた（9～12月に3か月間）。ラオス国立大学の学生インターンや、同校のSCG奨学金元受給者の学生に奨学金事業の手伝いをしてもらうなど、ラオス人学生インターンや ボランティアも随時受け入れた。

Ⅲ-８ 訪問受入れ

<計画>　寄付者、支援者の拡充と活動への理解のために、会員や開発教育のスタディツアーなどの訪問を受け入れる。

＜実施＞

この１年、以下のように参加・受入、イベント実施をおこなった。

8/14	ご支援者1名訪問
8/20-21	愛知県立大学スタディーツアー（　名）受入
9/12	学習院女子大学ラオス研修(22名)　受入
9/13	ご支援者6名 小学校訪問受入調整
10/19-27	ブックフェスティバル出展（ヴィエンチャンセンター）
11/1	N連事業 ポンサイ中等学校図書館引き渡し式
11/7-8	ご支援者1名訪問
12/12	奨学金授与セレモニー（カムアン県）
12/17	奨学金授与セレモニー（ヴィエンチャン都）
12/19	ALC奨学金　選考会議（ポンサイ中等学校）
1/13	(株)石光商事1名　現地視察（ポンサイ中 ヴィエンチャン県）
2/27	駒澤大学スタディツアー受入れ（ノーニアン小学校、ラオス事務所訪問）

注 N連事業：外務省日本ＮＧＯ連携無償資金協力